

第 37 回(2010. 5. 15 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「戌は犬」

戌は、古代中国では「滅(めつ)で、「ほろぶ」という意味があり、植物が枯れる状態のことをさす言葉だったそうだが、この文字を動物の犬を当てはめて人々に覚えやすいようにしたといわれている。

分類学上、犬はジャッカルと同じ仲間、犬科はオオカミ、アメリカオオカミ、ニホンオオカミ、ディンゴ、イヌに分かれる。ニホンオオカミは明治 38 年(1905)に奈良県の吉野村で捕獲されたのが最後で、絶滅したのではないかと思われる。純粋な日本種は「和犬」と呼ばれているが、今から 4000 年ほど前から日本にいたといわれている。その証拠に、縄文時代の貝塚からは犬の骨が多く発見されているし、銅鐸や埴輪に犬が描かれているが、中には猪を追う犬が描かれたものも発見されている。なお、1980 年にアラスカで発見されたおよそ 2 万年前の犬の骨化石は、世界で最も古いものといわれている。ちなみに、神社に石造の狛犬(こまいぬ)が一对(仁王と同じく口をあけている阿形像と閉じている吽形像)置かれているが、これは犬ではない。本来はエジプトから伝わった守護神のライオン像で、シルクロードをとおって東洋に伝わってきたが、日本では朝鮮半島の高句麗の犬だということになって「高麗犬」というようになったらしい。

犬と人間の関係

古くからの日本犬には、秋田犬、柴犬、紀州犬、甲斐犬、四国犬、北海道犬(アイヌ犬)あるいは日本スピッツ、日本テリア、狆などがいるが、日本スピッツはシベリア種の改良種だし、日本テリアは 18 世紀にオランダから入ってきた。また、狆は中国から朝廷に贈られた犬で、それぞれ日本で改良され現在に至っているから純粋な日本犬とはいえない。柴犬の一種である川上犬は、千曲川の源流である川上村で保存されているが、日本でも唯一村の名前が付いている珍しい犬である。また、柴犬には、まれにおとなになっても標準に満たない小さな柴犬が現れる。豆柴と呼んで愛犬家の間では、子供が生まれると奪い合いになるというが、成長すると通常型の柴犬になることがあるのでがっかりする、と聞くとおもわず笑ってしまう。突然変異で小型犬が生まれるのだが、まだ種の固定が完全ではない段階では、先祖の特徴すなわち大型に戻ってしまうのは、遺伝学の法則では当たり前のことである。豆芝認定協会なる組織があるそうだが、人気が出ればいかがわしいものが出てくるのも当然のことだ。動物の品種改良では先祖がえりといって数代前の特徴を受け継いだものが出てくるから、同定には非常に時間がかかるものである。

犬は(しっかりした)主人に従順な習性やずば抜けた聴覚、嗅覚、視覚や運動能力などから、昔から人間とともに暮らし生活に役立ってきている。たとえば、外国ではセントバーナード犬が有名で、小さな樽を首にぶら下げた大型犬だが、スイスでは 18 世紀頃から道に迷った旅人の捜索や道案内に従事していた。なかでも救助犬バリー号は 40 人もの生命を救ったことで有名である。そもそも、セントバーナードとは、スイスとイタリアの国境にある標高 2500m の峠の名前で、この峠を通過する旅人は常に風雪の脅威にさらされていた。あまりにも多くの犠牲者が出たため、ベルナール・ド・マントンは 1050 年、この峠に避難所を建設し、修道士たちに峠を通過する全ての人の宿泊、食事の提供を依頼したのがはじまりである。この聖ベルナール・ド・マントンが、セントバーナードの語源になったといわれている。1964 年にトンネルが掘られて、今では当時のような困難な峠越えはなくなった。現在、日本でも災害時における救助犬や障害者のための介護犬、あるいは麻薬犬などが人々の役に立って活躍している。麻薬犬は 5 年から 10 年で引退させるといわれるが、麻薬を嗅いでばかりいるので麻薬中毒になるからだ、とまことしやかにいう人がいるが、そうではなくて仕

事が非常に激務なので、かわいそうだから引退させるのだという。こういった介護犬、救助犬など、私たちは犬に護られ助けられて生活しているのだ。

犬は汗腺がすくないから、舌を出して体温を調節する。それなのに犬に服を着せて歩かせている人がいる。犬は気の毒だ。また、猫と違って人間のように社会性を持ち、群れをなして上位者には服従するという性格を持つ。したがってペットとして飼われた犬は、その家族構成には敏感で、場合によってはいうことをきかなくなる。自分の方が上位だと思っただけである。つまり飼い主がナメられてしまうのだが、自分のいうことをきかないからバカ犬だと文句をいう飼い主が多い。実は飼い主がバカなのだ。こういったことは人間関係においてもよくある現象だ。

犬あれこれ

江戸時代の武士の間で「犬侍」という言葉は最大の侮蔑語だった。現在でも「イヌ」という言葉は「スパイ」や上司に媚びる「腰ぎんちゃく」同様の侮蔑する言葉として使われる。ところが、犬を特別大切なものとした時代があった。それが徳川5代将軍綱吉(在位1680~1709)の「生類憐みの令」で、犬を蹴っ飛ばしただけで死罪になった例があった。当時、「殺生を慎め」という意味のいくつかのお触れが出されたが、それを総称して後世「生類憐みの令」といっている。本来は犬だけではなくすべての生き物に殺生してはいけないというお触れだった。ところが、綱吉が戌年の戌の日戌の刻に生まれたとあって、人々は過剰反応を起こして犬を特別扱いしてしまったきらいがある。現代社会でもよくある話である。これに反発した徳川御三家のひとつである水戸光圀(諸国漫遊で有名な黄門さま)は、犬の毛皮20枚を綱吉に贈ったという逸話がある。また、忠臣蔵の浅野内匠頭を切腹させたなど、悪評の高い将軍だったが、実際は学問好きな人で、取り巻きが悪かったのだという歴史学者もいる。

渋谷駅前に銅像がたっている忠犬八公は、大正12年(1923)に秋田県大館市の斎藤義一氏宅で生まれ、帝国大学(現東京大学)農学部の上野英三郎博士に貰われた。2年後に博士が亡くなった後、八公は野良犬となって放浪するが、最後は渋谷に戻って駅前の露天の焼鳥屋などでうろついて、道行く人や駅員などに邪魔者扱いされ、ボロボロになっていたのを、昔を知っている人が朝日新聞に投書して一躍有名になった。本当に忠犬だったかの議論は分かれるところだが、八公は昭和10年(1935)3月8日に死んだ。今は上野英三郎博士が眠る青山の墓地に埋葬されている。

上野公園に建つ銅像の西郷隆盛が連れている犬も有名だが、西郷さんの銅像は高村光太郎の父高村光雲(1852~1937)が制作した。犬は後藤貞行(1849~1903)の作で、この犬は薩摩犬のオスだが、実際に飼われていた犬は「ツン」というメス犬だった。

犬は多産系で安産だということから、妊娠5ヶ月の妊婦は戌の日を選んで岩田帯を巻く風習がある。皇室では「着帯の儀」というが、『平家物語』で有名な安徳天皇を懐妊した建礼門院がおこなった記録があるから、この風習は相当古くからあるようだ。岩田帯の語源は、妊婦には様々な禁忌があって、それを忘れないために帯を締めることから、物を忌むという意味合いがある斎(いつき)の肌帯で「斎肌帯(いはだおび)」となったが、それが訛って岩田帯になったという説がある。また、あるやんごとなき姫君の一行が京都府八幡市の岩田に通りにかかった際に、お姫様が急に陣痛が始まり、驚いた村人たちが特産の綿を敷き詰めて無事出産したことから、地名をとって岩田帯の名前が付いたと地元の人はいふのだが。

日本では江戸時代の武家社会において「犬みたいな武士」という言葉は嫌われたが、ペットとして飼育されてはいた。当然一般庶民は武家社会のしきたりには無関係だったから犬は可愛がられていた。ところが、ユダヤ教やイスラム教では豚と同じく不浄なものとしてあつかわれている。アラブ社会には「犬に噛まれたら3度手を洗え、水のない砂漠だったら砂で洗え」ということわざがある。狂犬病を恐れるのこともかもしれない、という人もいる。狂犬病は発病したら100%死に至る病気である。しかし、狂犬病は犬に限らずコウモリやアライグマなどからも感染するし、猫をはじめとしてほとんどの哺乳類は狂犬病の危険性がある。犬には大変気の毒な話だが、人間の生活に最も多く

係わり合っているから、狂犬病と命名されてしまった。人間社会にも同じようなこともある。雲竹斎もこれまで一生懸命やってきたが、雲竹斎が関わらないことまでも、アイツがやったおかげでダメになったなどと、ふだん何にもしない人たちからも濡れ衣を着せられることが多かった。だから犬の気の毒な立場がよくわかるのだ。